

不死の王と闘神

淫欲童子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死の王と共に歩む闘神の道の果てに何を掴むか

目次

新たなる目覚め	1
固まる地盤	13
気づかぬ再会	25
復活！至高の一人	36
新たな日常	48
再び求められる旅路〜最後に笑うのは支	
配者か神か〜	58
つかの間の休息	68
対立	82

新たな目覚め

びっ・・・・・・・・びっ・・・・・・・・びっ

機械の音が鳴る病室で男はゆっくりと目を覚ます

「俺は、勝ったのか？負けたのか？」

男はゆっくりと起き上がると机の上においてあるスマホに目を向けると、おもむろにスマホを起動する

「そんな、半年もたつてる？馬鹿な・・・・・・・・そうだ、ユグドラシル、今日閉鎖になるんだ！俺の作った世界が今日おわるんだ・・・・・・・・もう一度、ギルメンに会いたいな運営側としてじゃなくギルメンとして・・・・・・・・みんな許してくれるかなもう一年以上もログインしていないのにまだ席あるかな」

男はベッドから降りる

ガタン！

「ぐっ！！体が思うようにうごかない、財布は・・・・・・・・よかつた引き出しに入ってた」

機械の音がけたたましくなるなか男は病院を抜けだしておぼつかない足で歩く

「はあ、はあ、もう23時45分だ。もう、間に合わないのか！みんな……あ
れはネカフエ!？」

男は転びながらも進み、勢いに任せ入店しネットを開く

「間に合え！くそっ！私用アカウント封印みたいな形で凍結したんだっ！もう公用ア
カウントでいこう！」

23時59分男がログインする

く時間は少しさかのぼるく

ナザリック地下大墳墓

「ほんと、ひさしぶりでしたね、ヘロヘロさん」

「いや、本当におひさしでした。まだあったんですねナザリック」

「ええ。えっと転職して以来でしたっけ？」

「それぐらいぶりですねー。実のところ今もデスマーチ中ですよ」

「うわー。大変だ。大丈夫なんですか？」

「体ですか？ ちよーぽろぽろですよ」

エルダー・ブラック・ウーズが触腕を伸ばし、奇妙な踊りにも似た行動を見せる。

「といつてもこのご時世休めないんですけどねー。体におもいつきり鞭打つて働いてます」

「うわー」

「まじ大変です」

やがて2人の会話は互いの仕事に対する愚痴へと変化していく。

『アインズ・ウール・ゴウン』に参加するには幾つかの決まりごとがある。その一つは社人であること。もう一つは外装の人種が異形種であることだ。

しばらく盛り上がってた会話も1段落し、2人の会話が途切れる。

お互いにこれからがどうなることか知つての沈黙だ。

「いやー、それなのに来てもらつて悪かったです」

「何をおつしやいます。こつちも久しぶりに皆に会えて嬉しかったですよ」

「そう言つてくれると助かります」

「まあ、本当は最後までお付き合ひしたいんですが、ちよつと眠すぎて」

「あー。ですよね。落ちていただいで結構ですよ」

「ギルド長はどうされるんですか？」

「私は一応最後まで残ります。誰かが来るかもしれないから」

「なるほど。……今までありがとうございました、モモンガさん。このゲームをこれだけ楽しめたのは貴方がギルド長だったからだと思います」

モモンガといわれた骸骨（オーバーロード）は大げさなジャスチャーでそれに答える。

「そんなことはありません。皆さんがいたからこそです。私なんか特に何かしたわけではないです」

「それこそ、そんなことがないとは思いますが……本当にありがとうございました。では私はこれで」

「ええ。お疲れ様でした」

そして来てくれたギルド員6人の最後の1人が消える。

モモンガはへ口へ口のいた席をほんの少しだけ眺め、何かを振り払うようなしぐさをとりながらゆっくりと立ち上がる。

向った先には、1本のスタッフが飾られてあつた。

7匹の蛇が絡み合つた姿をしており、口にそれぞれ違つた色の宝石を加えている。

誰が見ても一級品であるそれこそ、各ギルドに一つしか認められないギルド武器であり、『アインズ・ウール・ゴウン』の象徴とも言える物である。

本来ならギルド長が持つべきそれが何故この部屋に飾られていたのか、それはこれがギルドを象徴するもので他ならないからだ。

このギルド武器を作り上げるために皆で協力して冒険を繰り返した日々。

チーム分けして競うかのように材料を集め、外見を如何するかで揉め、各員が持ち寄つた意見を纏め上げ、すこしづつ作り上げていったあの時間。

それは『アインズ・ウール・ゴウン』の最盛期の——最も輝いていた頃の話だ。

彼はそれに手を伸ばし、途中で動きを止める。

今この瞬間をおいてなお、皆で作りに上げた——輝かしい記憶を地に落とす行為に躊躇いを覚えたのだ。

最後までここに置いておくべきでは無いだろうか。

仕事で疲れた体に鞭を打って来てくれた人がいた。家族サービスを切り捨てて、奥さんと大喧嘩した人もいた。有給を取ったぜと笑っていた人がいた。

1日おしゃべりで時間が潰れたときがあった。馬鹿話で盛り上がった。冒険を計画し、宝を漁りまくったときがあった。敵対ギルドの本拠地である城に奇襲を掛け、攻め落としたときがあった。最強クラスのボスモンスターに壊滅しかかったときがあった。未発見の資源をいくつも発見した。様々なモンスターを本拠地に配属し、突入してきたプレイヤーを掃討した。

今では誰もいない。

42人中、37人が辞めていった。残りの4人だつてここに来たのはどれだけ前だったかは覚えていない。

そんな残骸のようになったギルドだが、輝いていた時代はあったのだ。

『アインズ・ウール・ゴウン』は基本多数決を重んじてきた。ギルド長という立場にはいたものの、彼が行ってきた行為は基本的には雑務であり、連絡係だ。

だからだろうか。ギルド長という権力を使ってみたのと、今始めて思ったのは。

彼は手を伸ばし、杖——スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを掴み取る。

手におさめた瞬間、スタッフから揺らめきながら立ち上がるどす黒い赤色のオーラ。時折それは人の苦悶の表情をかたちどり、崩れ消えていく。

「最後までいいかな。みんな許してくれるよな。．．．．くそつなんでみんな簡単に捨てられるんだよ！」

作り上げられてから一度も持たれた事の無かった最高位のスタッフは、ついにこの時を迎えるに当たって本来の持ち手の中に納まったのが寂しさを感じていた。

モモンガはナザリックを巡回しながら玉座へ向かう。その際メイドを引き連れていく

玉座の間につくと玉座にすわりながめる。執事の格好をした初老の男セバス・チャンを筆頭にメイド、プレアデスが並ぶ

そして玉座の隣に美女が一人、立っている。

設定では守護者統括、ナザリック大墳墓の最上位NPCの”アルベド”だ。

見れば見る程に、素晴らしい造形に感心してしまう。

思春期の童貞の小僧なら、一目で股関を膨らませそうな出来である。

そんなアルベドを暫く凝視していると、おもむろにモモンガがアルベドのコンソールを開いた。

膨大な量の文字がキャラクタークリエイトのコンソール一杯に広がり、拘りの深さが伺える。

流石はタブラさんだと、感心せざるを得なかった。

『ちなみにビッチである。』

「ビッチかあ、そう言えばタブラさん設定魔だったからな」

「これは酷いな」

モモンガ的にはビッチはあまり良くない様に見えた

アルベドの設定を見なければ、別こんなモヤモヤした気持ちになる事はなかった。

”ビッチである”と言う一文は、気持ち良く最後を迎え様とするモモンガに迷いを生じさせてしまったのだ。

ならば、その設定を変えてしまえば良いではないか。

気持ち良く、後腐れなく終われるのならばやむ無し。

だが、ギルドメンバーが独自の拘りをもって産み出したNPCを弄って良いものかと言ふ罪悪感も否めない。

暫し考えた後、最終的な結論を出した。

「最後だし、こんなモヤモヤして終わるのはな。」

モモンガは普段使う事の無い、ギルドマスターの特権を行使する。

クリエイトツールを無視した強制的な設定の変更である。

多少の後ろめたさはあったが、コンソールを少し操作しただけで、”ビッチ”という文は消える。

当然の事だが、設定欄にはビッチの文字を消した事による空白が生まれてしまっている。

空いた空欄に、何か新しい設定を入れるべきか、否か。

・
・
・

しかし、そんな事を迷うにしても残された時間は少ない。

『モモンガを愛している』

「うわっ！なにしてんだ俺、恥ずかしい……ひれ伏せ！」

玉座の間の配下をひざまづかせると天井を眺める

（タツチミー、ウルベルト、ヘロヘロ、ぷにとともえ、建御雷神、ペロロンチーノ、ブク

ブク茶釜、タブラス・マラグティナ他のみんなも……）

「楽しかったな……楽しかった……楽しかった」

（最後に会いたかったな……最後に会おうくらいいいいたったな。一影さん）

モモンガはゆつくりと目を閉じる

く時は戻るく

（間に合わなかったか）

男がゆつくり目を開けると森の中にいた

「ここはどこだ？あれ？声が女声？」

男は少し歩くと水場が見えてくる

「この姿は！」

目の前に映った姿はストリートロングの黒髪に光の無い漆黒の瞳に陶磁器の様に美しい白い肌、はち切れんばかりの爆乳、男の理想を体現したような括れ、引き締まった尻、巫女服と大きな数珠の首飾りをした20代の女の姿

「この姿は《妖艶の女宿 櫛灘 美雲》!?おれの運営用の公用アバター?どうなってるんだ?」

「とりあえず情報収集するか」

「……………」

モミモミ

「んっ……やばい!変なのに目覚そう。巨乳もいいな。うへへへへ。はっ!?俺は何を??」

そうこの男?女?は世界最大のMMORPGユグドラシルの運営の1人でありアイズ・ウール・ゴウンの1人なのだ。ただし私用の別アバターでの話ではあるが運営のゲーム監視役として二つのアカウントを持っていたがいつしかアイズ・ウール・ゴウンにすっかりと骨を埋めていた

「あっ!情報収集だった!」

男？は歩きだす

固まる地盤

森を歩いていると

「きやー!!!」

「なんだ？」

人の声に向かいフラリとあるいていくと

10歳くらいの女の娘が獣に襲われていた

「殺気投げ」

「ぎやうん!!!」

獣は1人で飛び頭をぶつけ血を撒き散らし死ぬ

(ふむ、ロールプレイングしておくかしかし美雲風は難しいから適当にキャラ付けしとくか)

「無事か？娘よ」

「は、はい……」

「そうか」

美雲は去ろうとするが

その後もエンリと戯れながら歩いていくと小さな村が見えてくる

「榴灘さん！あれが私の村です！ようこそカルネ村へ！」

「カルネ村か」

美雲はその日はエンリの家へと泊まりエンリの両親から情報を貰うことで1日を終えた

（翌日）

「もう行っちゃうの？」

「うむ、エラントルとか言うところで冒険者を試してみようと思っただけ。なにたまに会いに来る。それとも唇を奪いに来た方がよいか？」

「もう／＼／＼／＼」

村からでるとその方角に、全力で走る。俺のキャラは直接的な攻撃力は弱いがスピードはユグドラシルでもトップクラスまるでも本物の榴灘美雲のようなスピードだろう

「ついたか」

聞いていた情報を元に美雲はギルドへと向かう

ぎー

ギルドの扉を開けると視線が美雲に集まる

「……………」

それもそうであろう絶世の美女が胸元が大きく開いて袴の隙間から太もも等も見えていれば見ない方がおかしい

「冒険者登録を頼む」

「は、はい！では、ここにお名前等の記入を」

「うむ、あと私はこちらの国に来たばかりで字が読めん、何か駆け出しが受けれる一番難しい依頼を頼む」

「かしこまりました」

「なら俺達と一緒に依頼を承けないか？新人ならいろいろ経験したいだろ？俺はシルバーだし安心していいぜ」ニマニマ

下衆な笑いを浮かべ一人の男が話かける、さらな後ろには四人ほど控えている

「あの、彼らはあまりいい噂をききません特に女性からはいろいろと報告もあがつてますし」

受付のお姉さんがいつてくるが

「依頼内容は？」

「オーガ退治だぜ、危険だが金はけっこういいんだぜ」

「うむ、ならば一緒させて貰おう」

「へへ、ならさそつくいこうか」

六人は移動すると森へといく

「へへこまでくればばねえだろ」

男達は美雲を囲む

「さて？服を全部脱いでもらおうか？」

「ぎやははは、逃げようとしたら殺しちゃうよん？オーガに殺されましたって報告するだけだし！」

（俺は男だからこういうプレイは女の子からがよかった）

「くつくつくつ、野暮なわっばよのう。好きにするがよい。ただしできるのならな」

「へへへつ、あとでケツの穴まで舐めさせてやんよ」

男の1人が殴りかかってくる

「樽灘流は力0にして技10と知れ」

男はまるで勝手に転がるかのようにぶつ飛び頭から落ち痙攣する

「はっ！なにやっつてんだ！お前らやるぞ！」

四人が襲いかかる

「さて、主らに選ばせてやろう。更生し真面目に生き、わしの僕となるか。死かをな。工
リアヒール」

「ひっ！も！もう二度としないから！」

「や！約束する！あんたに従う」

「ふーふざけんな！おんなの尻になん「左様か」てっ」

美雲は軽く数回蹴るだけで男の体を浮かせ頭から落とす、その際に軽く蹴り首に体重
が乗るようにする

「ぐぎやつ!!?」

「ひっ！」

男の一人が逃げ出すが

「ぐぎやつ!!?」

同じ様に殺す

「さて、どうする？」

「「し、従います!!」」

残った三人はチャラそうなやつはアンと名付けよう。ハゲの凶悪面こいつはポン、チビはタンと名付けよう。三人共にシルバーか

「なら、主らは右からアン、ポン、タンだ、よいな？」

「「はい！ 姐さん!!」」

「なら、オーガ狩をしよう」

「「へいー!」」

〜ギルド〜

「あー!」無事でしたか」

「うむ、依頼だが少し狩すぎてな、他の魔物とかも狩ってしまった。引き取っては貰えるのか？」

「はい！」

「感謝する。アンポンタン!!」

「「へい！」」

アンポンタンは狩った獲物を次々運んでくる

「な！こんなに！これは！ゴールドプレートが4人でかる魔物！これを皆さんだけで？でもたしかシルバーでしたよね？それに二人足りませんし」

「あ？これは姐さん一人で狩ったんだ舐めてんじやねえぞゴラア!!」

「あいつらはオーガに殺されただけだしよう！運がなかったんだよ」

「姐さんの実力に文句あんのか？ああん？この証拠をみてもよう!!」

「ひっ！あ、あの」

「.....童共が」

美雲は殺気を出す

「「すいやせんでした！姐さん!!!」」

「すまないな」

「い、いえ、いま換金してきます。」
受付嬢は走っていく

バタン

「大変だ仲間が大怪我しちゃった！誰か回復魔法を掛けてくれ！」

(ちようどいいな)

「主、仲間のためにいくら出す？」

「あんた何を」

「タン」

「へい！姐さん!!おう、姐さんが助けるから金はいくらだせるか聞いてんだよ！仲間の命だろうが!!どうすんだよ！」

「わ、わかった！手持ちの金はすべてやる！だから助けてくれ」

男の仲間は腕の一部が欠損しており体をきずだらけである

「今回はサービスだ」

美雲は欠損ぐと直す

「うそだろ!?欠損まで直すなんて」

「ありえねえ！」

「金を」

「あ、はい」

男は金をわたすと

「街に広めてくれんかえ？冒険者、櫛灘美雲に声を掛ければ傷病人に治療をすると」

「は、はい」

「アンポンタン。この事を広めよ、感謝の印は金でいいともな。わしは帰る後のことはまかせろぞ？」

「へい！姐さん!!!」

く 一年後 く

真つ黒のスーツに身を包んだ男三人がギルドの扉の前に立っている

ギー

「「お疲れ様です！櫛灘の姐御!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

美雲はその前を歩いて椅子へと向かうとアンが椅子を引きポンが数枚の紙を渡す

「姐さん、本日の依頼です。しかしさすが姐さんです。冒険者になつて間もないのにいつきにアダマントタイト級になるなんて」

「修行は手を抜いていないようだな」

「へい！この間俺とアンは武技を習得しましたしね！俺三人もいまじゃゴールドプレートですぜ！これも全て姐さんのおかげでさあ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「へへ、みんな姐さんの話をしてますぜ」

美雲が周囲の声にみみを傾けると

『あれが、闇のリーダー妖艶の女宿「榴灘美雲」さんだ。なんて美しいんだ！

馬鹿あんまりみるなよ！アンポンタンの三人組に締められんぞ！

くそ！なんであんなやつらが

でもどうしたらお近づきになれるだろ

アンポンタン三人組の舎弟になるところからだろ今闇は勢力をどんどん伸ばしているからな』

「さすがですね姐さん」

タンは書簡を懐から出しながら言う

「……………」

「姐さんの噂は他の国も徐々に広がり初めています。そろそろ国王が姐さんを城に招く動きがでています。他の国はやはり噂でいどなんで実際に力をみせるのがはやいかと」（このチビは情報収集凄いなだよなあ、良くいろんな情報を拾ってくれるもんだよ）

「なら、しばらくは他国で活躍するでしょう。国王からもすぐに呼び声はかからんだろう。名声を稼ぎにいくぞ。お前らの子分も各地に行かせて情報収集及び操作をさせろ」

「「へい！姐さん!!!」」

榎灘が出ていくと三人も追いかけていく

気づかぬ再会

美雲が転移し数年がたった

エランテルの街の中

「ワシはしばらくカルネ村へ帰って休むゆえ主ら後の事は任せる。ワシへの仕事も適当に断るなりお主らで処理するなりすきにせよ」

「「へい！ 姐さん!!! かしこまりやした！ いったらっしやいませ!!!」」

三人は膝に手を付け頭をさげ見送る

美雲がカルネ村へ駆けていると

「心配がおかしい？」

村へ着くと

「きゃー!!!」

「助けてくれ！」

騎士が村人へ襲いかかっていた

「ギリツ！………櫛灘流 千年投げ!!」

地面に手を着けると気当たりで腕の幻覚が騎士に襲いかかる

『ぎゃあああ!!!』

「エンリとネムはどこじゃー!」

美雲は村人へ問いかけると

「森の方へ逃げました!東の森です櫛灘さん!」

「すまぬ」

美雲は森へ向けて走ると

カシヤツ!ガシヤツ!

漆黒の鎧を纏ったスケルトンがあらわれる

「デス・ナイト?この世界では珍しいはず!邪魔だ道を開けてもらうぞ!櫛灘流地中投げ!」

ドン!!!!

デスナイトは地中へと埋まり動かなくなつた

「無事でいてくれ。エンリ、ネム」

美雲は一緒に過ごす間に情がわいていた

「貴様！よくも至高の御方の作りしものを!!人間如きが!!」

美雲の前に豪華な衣服に身を包み真っ赤な仮面を着けた大きな者と漆黒のフルプレートメールの女

「のけ！ワシ今急いでいる」

「人間ごときが!!」

女は殴りかかるが

「流水制空圏」

女をすり抜けるように美雲が過ぎる

「一応確認だが、この先に二人少女がいなかったか？」

「いたとして答えると思うか？」

「答えぬなら時間の無駄故押しとおるのみぞ」

「至高の御方に愚劣な人間ごときが話掛けるか!!」

女はさらに武器で殴り掛かるが後ろをみせたまま

「騒がしな」

ガシャン!!!

「がはっ!？」

「なっ!?!下がれアルベド! (かなりの強さ! とりあえず敵対は避けよう。戦闘になるにしてもアルベドでは時間稼ぎができそうにないから発動まで時間の掛かる魔法は使えない相手のビルド構成をほとんどわからない今は慎重にいくべきだ)」

「!?! (アルベド!?!)」

「安心しろその少女達は私が森の中で助けた。今は守護の魔法を掛けているから騎士程度なら脅威になりえないだろう」

「ほっ、そうか感謝する。といたいところだが実際見るまで信用はできんな」

「こちらとしては敵対の意識はない。アルベド二人をここまで連れてきてくれ。くれぐれも丁寧にあつかうように」

「危険です! アインズ様!」

「二人の安否が確認できるまで危害を加えるつもりはない、違うか」

「うむ」

「だそうだアルベド。つれてきてくれ」

「しかし! わかりました」

フルプレートメールの女は森へと入っていく

(しかし、アルベド、アインズ、気になる単語が出てきた確認しねえとな。)

美雲が考え事をしてしていると

「美雲さん!!」

「美雲お姉ちゃん!!」

「エンリ! ネム!」

二人が駆けてきて美雲は抱き締める

「あのお二方が助けてくれました。」

「そうか、二人共先に村へと戻っていてくれ。お二方には私からも感謝の意を伝えて案内する。先に村の片付けをしていて欲しいんだ」

「はい、行こうネム」

「うん」

二人は村へと向かう

「二人を助けて頂き感謝する。アインズ殿でよかったかな?」

「ああ、こちらこそ部下が失礼した。我が名はアインズ・ウール・ゴウン。マジックキャスターだ。こちらは部下のアルベド」

「.....」

女の方はアインズの少し後ろに控え無言で警戒する

「私はアダマンタイト級冒険者の櫛灘美雲と申す。して、アインズ殿、失礼ながらこの言

葉に心当たりはなかるうか、「ユグドラシル」「ナザリック地下大墳墓」「ギルド、アインズ・ウール・ゴウン」「モモンガ」

「どこでそれを!?モモンガとは私の前の名だ。櫛灘殿はプレイヤーなのか!?もしかしてアインズ・ウール・ゴウンのメンバーを知っているのか!」

「モモンガさん?それにその装備!手に持つ杖はスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン!?嫉妬マスクの下は骸骨ですか!?本当にモモンガさんですか!」

「私を知っているんですか?もしかしてどこかで会いましたか」

アインズは仮面を外し骸骨の顔が明らかになる

「お久しぶりですね!へろへろさんは!?たつちみーさんは!?タブラさんや茶釜さん!ペロロンチーノさんはもきてるんですか!!」

「落ち着いてください!こちらに転移したのは私一人です。しかし皆さんともお知り合いとはどこで会いましたっけ?」

「私ではなく私の半身があなたと共に旅をしていたハズですが分からないですか?」ニマニマ

「えっと、どこでしたっけ?」

「設定読んでないですね!せっかく頑張って書いたのに!」

「えっ?教えてくださいよ!」

美雲がアインズと楽しげに話すのを面白くないと思う者もいた

「アインズ様！何者なんですか！その女は!!」

強い嫉妬の念が美雲に向けられる

「ほう？気になるか？私達の関係が」

「なっ!?!」

美雲はアインズの腕に身を絡め胸で腕を挟む

「モモンガさんはこれが好きでしたもんね」

「………」パー

アインズの体は常に光り続けている

「ぐうっ！アインズ様はそんな人間の女がいいんですか！う、うあああああ!!!私では

ダメなんですか!」

「お、落ち着けアルベド!」

「あつはははははは!!!安心しろアルベド、わしは男に興味はない。ちとからかい過ぎたな。すまなんだ安心せよ主はモモンガに好かれておる、何しろナザリツクのNPCのなかでアルベドに御執心だったからなあ？これを期に嫁にしたらどうだね、ギルマス?」

「え?なんでそれを!」

「本当ですか?アインズ様!!」

アルベドの期待の眼差しにアインズはたじろぐ

「と、とりあえず正体を教えてくれませんか？」

「アインズ様く、櫛灘とか言ったわねあなた中々良いことを言うじゃない。愚劣で脆弱な人間にしては見所があるわね」

「どうも、わしの正体はナザリックにいかないと明かせないからとりあえず後のお楽しみかな。とりあえず村へ行こう」

村に戻ると後片付けがすすんでいた。そして一人の男が美雲に近づくと

「大変だ美雲さん！村にまた騎士風の者達が近付いています。」

「ワシに任せ主らは家に隠れておれ」

「はい！」

村長以外は村への建物へと入る

「モモンガさんは帰っていいですよ？」

「いえ、お付き合いますよ」

「やれやれ」

話していると騎士達が到着する

「私はリエステ王国騎士団団長ガゼフ・ストロノーフと申す村が襲われていると聞いて駆けつけた」

「村はこの櫛灘とその知人アインズとその部下の三人で守った」

「闇のアダマンタイト級冒険者、妖艶の女宿どのであるか!?これは失礼した」

馬から降りて頭を下げる

「して、櫛灘殿。今村を囲むように敵が配置されている。よろしければご助力願えないだろうか」

「ワシには、村を守るべきものがある。助力してる間に何かあってもつまらん。」

「そうか、アインズ殿は」

「我々も生憎だがお断りさせて頂く」

「そうか、お三方村を守ってくださいありがとうございます。もし、よろしければ村人を守っていただけないだろうか」

「アインズ・ウール・ゴウンの名に掛けて守ろう」

「ありがとう」

素晴らしいアインズの手を握り深々と頭を下げる

「これを」

アインズはガゼフにあるアイテムを渡す

「アインズ殿からの物ならありがたく頂こう」

ガゼフは身を翻し部隊を連れていく

美雲達は村人と共に村の倉庫へといく

「あれはアークエンジェルフレイムなぜユグドラシルのモンスターが」

「……………」

しばらくするとアインズとアルベドが消え入れ替わるようにぼろぼろのガゼフとその部下が現れる

「やれやれ、エリアヒール」

「これは？妖艶の女宿殿？」

「あとはアインズにまかせておけ」

「ふっ」

ガゼフは軽く笑うとその場に倒れ眠りにつく

復活!至高の一人

ナザリック地下大墳墓第六階層闘技場

ここに今ガルガンチュアとヴィクティムを覗く各階層守護者があつまっていた。

「みな、良く集まってくれた。さて今日はある人物を皆に紹介したい」

アインズはそう言い美雲がアインズの後ろから現れる

「アインズ様、紹介したいのはその人間の女でありんすか?」

各階層守護者からも敵意と疑念の視線が集まる

「この物は我らが至高の42のうち一人の有益な情報をもっている」

『なんと!』

「もう、無理だ」

「櫛灘殿?」

美雲は金髪褐色のダークエルフの少女、アウラに近付くと

「え?あたし?」

「かわいいなあ!アウラ!!」ムギユ!

アウラをおもむろに抱き締める

「うわっ！なんだ！人間！」

アウラはアインズの客人と一言で手出しをしないものの嫌悪感をだかている
「シャルティアも!!」

「ひっ！離しなんし！その脂肪の塊をおしつけるなでありんし！」

そしてシャルティアも抱き締め頬擦りする

「おほん！櫛灘殿本題を進めてくれるかな」

「すまなんだ。モモンガ殿。百聞は一見にしかづと言うからな」

美雲は二人を離すと闘技場の真ん中に移動する

「妖艶の女宿【櫛灘美雲】の名を持って願う。権限せよ封印されし我が半身！一影！」

ズゴゴゴ

地面から等身大の石像が現れる

「まさか」

『一影様の像?!』

美雲は像に手を当てると

「久しいな我が半身よ。目覚めよ我にして我に在らざる者よ！そして再び一つと成らん事を！」

美雲の体は強い光が覆い、一影の像を闇が覆う

二つは一つなりやがて光は修まるそこには鍛えぬかれた禍々しくも美しい肉体を持つ男、黒髪のオールバックに漆黒の瞳、背中からは漆黒の大きい蝙蝠羽が生えているコマカミからも側頭部にかけて角が生えており顔の鼻より上は般若の仮面のような見た目には人と遜色はない、仮面であったならイケメンであろう

「答えは、最強の武術家【一影】だけ？モモンガさん。久しぶりだな！まあ、いまさらどの面提げて帰ったってはなしだろうけどやっぱり帰ってきちやいました。へへへへへ」
美雲いや、今は一影だろう一影はきまらず頭に頭をかきながらモモンガに言う

「そんな！お帰りなさい！一影さん！ずっといいいたかったんでさよみんなでおめでとうって！だけど一影さんが意識不明になつて皆心配していたんですよ！」

「へへへ、まさかお帰りなんて言つて貰えるなんて。なんか嬉しいな」
「ほ、本当に一影様ですか」

アウラが近より目を潤ませ聞いてくる

「ただいまアウラ」

「うああああああ!!!おがえりなさいませー!!!」

アウラは泣きだす。

「すまなかつたなアウラ」

一影は片膝を付きアウラを抱き締める

「いちえいざまあー！！」

他の守護者も涙を流す

場が落ち着き

「一影さん、今までどうしてたか皆に教えてくれませんか？皆気きになっているでしょうし」

「(モモンガさん、からはうまく話を作ってくれとコールを受けあらかじめ言われたがどうするか)まず、皆に謝罪する。俺は一度ナザリックを棄てた身だこの事実は消えない。許しは求めない、謝罪も自己満足だ。お前達が出ていけというなら出ていこう。死ぬというなら殺しに掛かってくれていい抵抗はするかもしれないが。俺は自己を優先した。てめえらの主にふさわしくねえ存在だ」

一影は胡座をかいで触ると拳を地に付け頭を下げる

『なっ！そんな！頭を上げてください』

「ちよつと一影さん!どういうつもりですか!」

モモンガも理由は知っているが焦っている。そうだろうこのままでは一影がまた出て行きかねない。せつかく再会した共が

「おそれながら発言をお許しください」

「許そうアルベド」

「一影様は何故我らをお捨てになられたのですか?他のお隠れになっっている至高の御方々も我らを捨てられたのですか?もしそうなら私は至高の御方とはいえ、愛するアイズ様を悲しませた事を許せませぬ」

「アルベド!至高の御方に不敬だぞ!」

メガネの赤いスーツを着た悪魔デミウルゴスがアルベドに叱咤するが

「御答えください!」

「いいんだデミウルゴス。アルベドまず、何故捨てたかだったな、俺達至高の42人はユグドラシルと別の世界を自由に往き来できる力をもっていたその世界をリアルと呼んでいた。リアルの世界で俺はその世界一の強者を決める闘いが決まった、俺はもともと血湧き肉踊る戦場を求めていたその頂きに立ち上がった。そして頂で広めたかったナザリック地下大墳墓の存在を。ただその道のりは修羅の道、頂は常に狙われ続けるもの終わり無き修羅道。俺の道に行くにはナザリックに戻る時間はなくなるから全ての者

をモモンガさんに預け己が道を進んだ。モモンガさんのいつでも帰って来てという言葉に甘えて。さらにユグドラシルの崩壊の情報もありリアルで手を打たなければならなくなつたが仲間に不安を与えないため一人で動く決意を決めた。結局俺は勝つたよ。うだが深手をおいしばらく生死の境をさ迷い、ナザリックの名を広める事すらできず今さらのこのこと帰ってきた愚か者さ。俺が帰る時リアルとの移動能力は失われたが俺は半身がこちらにいたから戻つてこれた。ユグドラシルの崩壊を食い止める為にリアルでナザリックの名声を広めるはずが何もできず無様に生き恥を晒してる!!!あのまま死ねたら!ぐうっ!・・・すまん取り乱した。他の奴らもユグドラシルに残りたかつたがリアルに人質が要るものやリアルの世界の牢獄に囚われたもの任務中に知らせを受けても既に力を失つていたもの。皆ナザリックに戻りたくても帰れなんだ、だから他の奴らはお前達を捨ててない!他の奴らを恨まないでくれ!憎むのは俺だけにしてくれ!俺はモモンガさんの優しさに甘えていた帰る場所を当然のように守つてくれていたモモンガさんに!これが全てだ」

一影が顔を上げると皆が泣いていた

「そんな!一影様はナザリックの為御一人でに戦つていたのでありんした。それをワッチ捨てられたと勘違いしてたでありんしたなんて」

「申し訳ありません。申し訳ありません」

「何故泣く、俺がナザリツクを去ったのは事実なんだぞ」

アルベドは泣きながら一歩前に出る

「お許しください!」影様!私は愚かにも至高の御方がナザリツク地下大墳墓の為に単身修羅道を進まれようとしていたにもかかわらず恐れ多くもアインズ様を悲しませ我らを捨てたなど!不敬の数々、さらにもう一方の半身の一影様に攻撃や暴言の数々この命を持つても償い切れません。されど、謝罪の一旦にでもなればどうかこの命をお納めください」

アルベドは俺の前に膝をつけ首を差し出し目を閉じる

「ワツチもでありんす」

「あたしもご無礼を働きました」

そう言いシャルティアとアウラもアルベドに並ぶ

「やめろ、謝るのは俺だ。お前達に罪はない」

「そんな!」

「姿を偽っていたんだその事はきにするな。それにアルベドの主張は正しい、もしそれに罪を感じ罰を欲すのなら、俺の愚行を少しでも許してくれるということでおあいこにしないか?」

「そんな！愚行など！ナザリツクの為に動かれていたのに！なんと慈悲深い」

そしてまた、一同が泣き始めてしまう

ようやく場が落ち着くと

「さて、誤解も解けたことだ。皆前回のように一影さんの評価を教えてください」

「評価ってモモンガさん。本人の前でいいじゃないか？」

「いえ、皆正直に答えてくれますよ。まあ、私に寂しい思いを指せた罰ということですね。内容でもおとなしく聞いてくださいね。」

「わーったよ」

そう言うアインズは少し嬉しそうであった

「おほん!きてシャルティアから」

「かしこまりんした。一影様はアインズ様同様至高の42人の御一人で美の化身でありんす世界一美しい御方。アインズ様とは対になる生の美を体現されし慈悲深き御方」

「続いてデミウルゴス」

「はっ、一影様は比類無き戦術眼と孤軍要塞と言われる程の戦闘能力を兼ね備た、孤高なる覇者の風格を持つ御方」

「コキュートス」

「コフー、各階層守護者ノ誰ヨリモ強者デアリ、マサニ最強ノ名ヲ体現シタ御方。ナザリック地下大墳墓ノ絶対ナル支配者」

「アウラ」

「慈悲深く、格好よく、最強な方です」

「マーレ」

「え、えっと、とつても優しく格好いい方です。」

「セバス」

「至高の御方々の最強の矛であった御方。そして我らの元へ戻ってくださいました慈悲深い御方」

「最後にアルベド」

「まさしくナザリツク最強の矛であり、愛すべきアインズ様と同じ私達の最高の主でございます」

（なんの罰ゲーム？これ）

「うむ、皆の気持ちよくわかった。私はこれより一影さんと話がある故にお前達は各自持ち場に戻れ」

『御身のお心のままに』

く モモンガ私室 く

「いやー、焦りそうでしたよ。いきなり捨てとか言うんでもうまくいつてよかったですね」

「良かったじゃねえ！このクソ骸骨！なんだあの馬鹿みてえに高い評価は悶え殺す気か

！」

「まあ、悪いよりいいじゃないですか。あと実はお話したいことが」

「あん？んだよ」

「口調なんか悪くなってますね？実はアルベドなんですけど設定を実はビッチであるをアインズを愛してるにしてみました。タブラさんの作ったNPCを汚してしまいました。」

「ぶあーはっはっはははははは!!」

一影は腹を抱えて爆笑する

「ぐうっ！あんまり笑うとアルベド以外の各女キャラ全員をハーレムにしようとして全員に娘さんをくださいっていった挨拶周りの記録を上映しますよ」

「さーせんした。まあ、安心しろよタブラさんは寝盗られたっていつて一週間位ネタにするくらいでゆるしてくれるし。タブラさんの作成手伝ったときモンガさんの嫁を作ろうってことで盛り上がっちゃいましたよぶっっちゃけ鞆に修まったかんじ？骸骨だから股間の刀は無いけど！ぶふっ！」

アインズはいらっとしつつも懐かしんでいたこの感覚を

「それと勝手にアインズ・ウール・ゴウンを名乗っちゃったんですけど」

「それもモモンガさんだけが許されると俺は思う。最後までこのギルドに残ったあんたがな」

「一影さん。そう言えば半身つてなんですか？あんな機能なかったですよね」

「企業秘密だ。まあ、気が向いたら教えてあげますよ。」

そう言うと部屋から出ていく

「部屋で悶絶しながら睡眠とってきますね」

パタン

「そっか、一影さんは寝れるのか。うらやましいな」

新たなる日常

ん？

目を覚ますと腕の中に温もりがあつた

「暖かい、いや熱い？」

目を開けると

マシナリーの少女メイドことプレアデスの一人シズ・デルタが俺のベッドの中でオーバーヒートしていた。

「解せぬ」

と美雲のセリフを言っていないで起き上がると

「体調不良かな」

とりあえず布団を掛けて俺は部屋を出る。腹減つたし食堂でもいくか

く ナザリツク食堂 く

俺はご飯、味噌汁、漬物、納豆、魚の塩焼きをとり席を探す

「となりいいか？ ナーベラル」

「はい、……!? 一影様!? 何故此方に!? 至高の御方の前で食事とは失礼いたしました。」

ナーベラルは立ち上がり頭を下げる

「そう言うの面倒だからいいよ。それより一緒に食べようぜ」

「いえ、そんな恐れ多いです。」

「ここで悪戯心がわいてしまう、もしこの評価がばか高い存在がチャラ男っぽくしたらナーベ、俺はお前と共に食事をしたいのだ

一影は立ちナーベの手を握り腰に手を回して抱き寄せ、顔を近づけながら悲しそうな目をしてささやく

「お前は嫌か？俺との食事は、もしそうなら言ってくれ俺もお前に迷惑をかけるつもりはない。だが俺はお前がいいんだ」

「い、一影様／＼／＼／」

ナーベラルはうつとりとしながら頬を染め見上げる

「返事は？」

「かしこまりんした」

「よし、なら食べようか」

俺はナーベラルを解放して食事を取り始める

「あつ」

「どうした？」ニマニマ

「い、いえ。それでは失礼します。」

「うむ、よろしい」

「一影様、そう言えばシズはご一緒ではありませんでしたか？本日はシズが起こしにいかれたと思うのですが」

「なんか俺のベッドでオーバーヒートしてたからベッドで寝かせておいたぞ？」

「なんと不敬な！申し訳ありません。後で厳しく叱っておきます」

「いや、別にいいんだけどさ」

二人で他愛もない話をしていると

「あー！ナーブちゃんズルイっす！一影様とお食事なんて羨ましすぎるっす!!」

「一影様の御前ですよ！静かにしなさい！この駄犬が」ベシッ

「あう！いたいっすー、ナーブちゃんだけズルイっす！」

騒いでいるのは赤い神を後ろで三つ編にした美女ルプスレギナ・ベータである

「おう、今度はルプもさそうよ」

「本当すかつ！嬉しいっす！」

「ああ、今日はお先に失礼するよ」

「一影さまお供致します」

「いや、いらなただけど普通にプラプラするだけだから」

「いえ、至高の御方が付き人すらつけづ歩くのはいかがかと」

ナーベラルは無表情のままだが何故かあつが強い、あと皆以外と頑固であるのが最近わかつてきた

「なら好きにしろ」

そう言い一影はナーベラルを連れて歩きだした

く ナザリックスパ く

「あくく、生き返るはく、やっぱり命の洗濯って言ったら風呂だよな、なあ？ナーベ」

「は、はい、一影さま」

ナーベラルは顔を真っ赤にしながら俺の方をチラチラと見てくる

「さて？そろそろ体を洗うが背中ながしてくれるか？」

「かしこまりました」

ナーベラルは俺と共に湯船からあがると背中を流し始める。しかし何故だろうか？美雲の体の時は一切性欲とかは感じなかったが今は凄く渴く

「ナーベ次は前だ」

「は、はい // // // //」

ナーベラルが前にくるとナーベラルの姿が良く見える。濡れた艶やかな黒神、白い肌、バランスのとれたスタイル。渴く

「ナーベ、風呂でタオルを巻くのはマナーに反するな」

「申し訳ありません、しかし私ごときの裸では至高の御方の御目汚しになるかと」

俺はナーベラルの腰に手を回し引き寄せる

「ナーベラル、御目汚しとかは俺が決めることだ。勝手にきめんじゃねえ」

「もうしわけあ、ひうつ!？」

ナーベラルの鎖骨に指先を当てゆっくりと胸の上に巻かれたタオルを端に手をもつていく

「ナーベ」

「い、一影さま（ああ私は今日至高の御方のお手により始めてをむかえられるのね。）」

ナーベラルとの顔の距離がどんどん近づくと

ガシツ!!

「おい、クソ淫魔。何をしている」

俺は自分の頭を掴んだで有ろう存在のドスの聞いた声にゆっくり振り替えると

「や、やあ、アインズさん。目が赤く光って怖いよ?」

「ナーベラル、すまないが風呂からあがって貰えるか? もう少ししたら他の男守護者もくる、それに私は一影さんとオ・ハ・ナ・死をしないとイケないからな」

「か、かしこまりました」

ナーベラルはタオルを巻いて出ていく

「さて? ゆっくり覇那死を死熔か?」

「とりあえず、アイアंकローをやめよう一影君浮いてるんだけど!? 頭ミシミシいつてるよ!? あたまパーンってなっちゃう! 脳髄がはみでる!!」

「ハハハハ飛びでたら治癒魔法か蘇生魔法を掛ければいいじゃないですか。」

「ノーノー! それダメなやつ。ほら一影君息子をプラプラさせながら死ぬのなんて威厳なくない?」

「ハハハハ何言ってるんですか。もうナーベラルにどうどうと見せてセクハラしてたんでしょ? 今さら誰に見せても代わりませんよ」 ミシミシ

「みぎやー! アインズさんステイ! ステイ! 何を怒っているか説明フリーズ!」

「フリーズではなくプリーズですよそこは」 ペイツ

アインズは俺を話すと前に仁王立ちする

「くうつ、いきなりアイアンクローは酷くないですか?」

「あなたは何を考えているんですか!!!」

「うおおつ!?!どないしたんですか?」

「彼女らは私達が作った娘同然の存在ですよ!?!それを真面目に付き合うならまだしも汚すような真似は!?!私が言えた義理じゃないですけどそれでもやはり」

アインズはどこか納得できないようにいつてくる

「アルベドの件とかまだ気にしてんのか?それに他のやつらも汚すって言うけどどうならこのままずっと部下と上司でござすのか?」

「そのの何がいけないんですか?彼女らの好感度はもともと作られたようで彼女らに申し訳が」

「はあく、青臭えよ。モモンガさん。アルベドの設定は愛してるで愛し続けるではないだろ?ならいつか愛想を着かされるかもしれない、その愛を受け止めることは彼女を汚しているか?彼女の心を縛っている訳じゃねえ、自分よりにしただけで支配してる気分か?自惚れなよ?あいつらの設定に俺らを愛し続けるなんて書かれてなかったろうが。なら好感度は高くても振られたり嫌に感じることもあるかもしれないねえ。それなら受け入れられても汚したことはないならんだろ。」

「一影さん」

「ナーベラルとも遊びじゃねえ。ここはナザリック地下大墳墓ここを俺のハーレムにしてやろうぞー!」

「まだお説教が必要なようだな!」

「うえ?! いい感じに誤魔化せてなかった!？」

俺達は顔をあわせると

『ぷっ! アハハハハハハ!』

「おや、一影様もいらっしやいましたか」

「おっ、お前達も来たか、皆で風呂に入るとしようか」

男守護者が風呂に入っているとアインズはそう言い風呂に入る皆で風呂にはいる

「しかし、前も言っていましたね一影さん、ナザリックでハーレムを作ると」

「いいでしょ? 別に」

「私もそれには賛成です。」

デミウルゴスがメガネをくいつとしながらいってくる

「ナザリックの覇者であるお二方にはいずれ御世継ぎも必要になるかと思われますので」

「そ、そうか? しかし私からするとお前達は大切な子供のような存在だ」

「おお! なんとありがたきお言葉! このデミウルゴス今の言葉を末代まで語り継ぎま

しょうぞう」

「俺は恋愛対象だがな、子供かあ。どう思うよコキユートス」

「コフィー！御二方ノ御子息を御守リシ、才世話デキルノハ至高ノヨロコビ」

「ハハハハいずれ爺とか呼ばれたりしてな」

「爺！アア！ナント甘美ナヨビカタ」

コキユートスはトリップしてしまつた

「マールはどうだ？」

「ぼ、ぼくは、アインズ様や一影様とのお子なら欲しいです」

「だってアインズさん。性転換したら？」

「ハハハハ嬉しいことを言ってくれるねマール。性転換なら一影さんができるじゃない

ですか。美雲の姿でいいんじゃないんですか？」

「いや、俺のベース男ですし。マールを女のこにしてみるか」

「ハハハハできるならそれもいいかもしれないね」

二人でじょうだんをいっている

「あ、あの、御方の望みとあれば僕は」

「ほう？なら今から大人のお勉強でも」ワキワキ

「おい、クソ淫魔、マールに変な事を教えるな」ガシツ

「あつ！待ってアイアンクローだけは」

「これは、アインズクローだ」

ミシミシミシミシ

「アバババババババ」

まあ、こんな日常も悪くはないかな？

く その日の深夜 く

各守護者とプレアデスは集まりなにやら密談をしていたが至高の二人はしるよしもなかつた

再び求められる旅路～最後に笑うのは支配者か神か～

「ナザリック地下大墳墓玉座の間」

「え？冒険者？」

「そうです！一緒に冒険者やりましょうよ！」

「アインズは嬉々としていつてくるが正直めんどい

「いや、俺もうある程度冒険してますし。もう全部情報渡しましたよね？」

「そうじゃなくて！ユクドラシルみたいに又一緒に冒険したいんですよ！」

「はあ、俺もモモンガさんと冒険したくないわけじゃありませんが今私も冒険者としての仕事が忙しいですよ。俺いま巷で何て言われてると思います？」

「聖女、女神、癒しの巫女、ですよね？」

「それが冒険者登録から面倒みたらアインズさんは楽しめますか？」

「たしかに冒険者ロールプレイングがあんまり面白くないですね」

「やっとなかったか。」

「でも、また一影さんと旅がしたいです。まだ見ぬ地へといったり一緒に感動を」

「はあ、ここの言うのに弱いんだよね

「別に行かないとは言っていないじゃないですか。しばらく好きに冒険者稼業で遊んでください。そしてたら一緒に冒険しましょう。私は今立場もあります。今後動くのに一緒にいいか別々がいいかを見る機会としてもいいですしね」

「そうですね。では、アルベドを呼んで話を通していきます。」

「いつてらっしやい！」

アインズは嬉しそうに駆けていく

「いったな」ニヤリ

《デミウルゴス、玉座の間へすぐきてくれ》

連絡して直ぐにデミウルゴスは現れる

「デミウルゴス御身の前に」

「デミウルゴス君に極秘命令があるこれはナザリックの士気にいづれ関わることであることだ」

「なんと！このナザリックの士気に！」

デミウルゴスは神妙な顔になる

「故にモモ、いやアインズさんにも内密に動け。時期は追って知らせる何時でも動ける

状態にしておけ」

そう言いデミウルゴスに伝える

「かしこまりました」ニヤリ

くしばらくして

アインズとナーベラル、アルベドが入ってくる

「二影さん！ナーベラルを連れていくことでアルベドの許可が出ました。」

「良かったですね。最初の一步を一緒に行けないので、これは俺からのプレゼントです。後アルベドにはこれから今まで以上に苦勞を掛けるのと寂しい思いをさせたこと、そしてタブラさんと一緒にお前を作ったから父から娘へのご褒美のプレゼントをまとめて

送る感じかな、これに気に入ってくれたら一つパパのお願い聞いてくれるかな？」

「そんな！褒美など恐れ多い！何でも御命令ください！」

アルベドはひれ伏す

「プレゼントってなんですか？」

「これですよ」

俺は一つの指輪を出す

「それは！超レアアイテム星に願いを！〔シューティングスター〕じゃないですか！」

「モモンガことアインズ・ウール・ゴウンに生物としてのかりそめなれど不老の肉体を与えよアインズの心の形をし生物的能力は人と遜色なく身体能力はかわらぬ肉体を」

指輪が光り魔法陣が現れる

「これは！（俺の人間の時の体）」

「これはなんと神々しいお姿」

「アインズさん。せっかく冒険者になるんです野営飯や酒で騒ぐつても悪くないでしょ？寝れない食べても味がしないこれじゃあ心が乾いちまう」

「ありがとうございます！一影さん！凄いい感情制御もありますね！今度皆で宴会しましょね！絶対ですよ一影さん！」

アインズは自分の体を触り子供の様に喜ぶ

「ぎやあああああああああ
!!!!!!!」

叫び声がナザリツクに響きましたとき

「ときー!じゃねーよ!」

「何一人で騒いでるんですか? 悪死汚鬼はこれからですよ?」

このクサレ骸骨この感じ逃げてきたな?

「てめえ! アルベドを抱いてねえな? あの状況で! このヘタレ! ヘタレ骸骨! ヤーイ
ヤーイヘタレ」

「覚悟は出来てるんですね」キュピーン

この骸骨絶望のオーラを垂れ流しにしてやがる

「アインズ！クローーーーー！！！！」

「甘いー！」

俺は避けると壁に垂直に立つ

「ヘタレの攻撃に捕まるかよ！ヤーイヤーイヘタレ骸骨〜」

俺は壁や天井を跳ねながら逃げる

「逃がすか〜！！！！超位魔法！」

この後ナザリックを巻き込んだ大鬼ごっこ大会が繰り広げられた

「みぎやーーーー！！！！」

「フハハハハハハ！！！！さあ楽しい汚覇那死の時間だあ」

ちゃんちゃん♪

ナザリツク秘密の部屋

「久しぶりだな。千影、時雨」

美少女は鏡の中に捕らわれと美女は鏡の外で雲の巣に捕らわれているこの二人は特殊設定で美雲のときは千影、一影の時は時雨の封印が解除できるようになっている。今はどちらでもだせるが片方は封印されなければならない

「時雨、おはよう」

「ん……いちえ……い？」

美女は漆黒のポニーテールにお尻がギリギリ隠れる紫の和服に鎖帷子、禪をした巨乳の美女

設定は俺の対武器用の師匠という設定だ

種族 鬼人

カルマ値 +500極善

職 忍者

武術家

鍛冶師

剣と兵器の申し子【コラボーイベント報酬】

獣使い

「久しぶりだな」

「……ん」ギョツ

時雨は俺に抱きしめながら胸に顔を埋める

「時雨、実はこの装備を鍛え治して欲しいんだ後、このリストにあるレベルの武器を用意してくれ」

「ん……任せてお……け」

「ありがとう」

俺は別の要件をかたしに行こうとすると

グイッ

服の裾を掴む

「もう少し、一緒にいようか」

「………コクッ」ニコッ

ヤバイ!かわいい!!

つかの間の休息

そう言えばしばらくエランテルにしばらく行つてないなあと考えつつナザリックなの森に来ていた。ここはアウラの担当区だ

「どうしたんですか？ 一影様」

「ん？ アウラか。いや久しぶりの休みを謳歌していたんだよ」

「そうなんですか！ でしたらいい場所がありますよ！」

そう言うアウラに二つ返事をお願いし移動する

「これは、美しいな」

小さな一本の木があり周りは少し開けている。そして天井一面の星空

「アウラ頼みがある」

「なんですか？」

「木に寄りかかるように座ってくれ」

「はい！ こうですか？」

アウラは地面に胡座をかいてすわる

「少し、我が儘を許してくれ」

「ふえ!? 一影さま!」

俺はアウラの胡座を枕にし横になって空を見上げる

「少しだけ。休ませてくれ」

「はい」

少しだけ弱みを見せてもいいかな

「アウラ」

「なんですか?」

「俺な、ユクドラシルを護りたかったんだ。どうしてもリアルに捕らわれる皆と最後にまた一度でいいから集まりたかった。リアルで世界チャンピオンって称号があるんだけどな。それになればまた、ほんの一瞬でも皆を集める事ができるかもしれないと思ってた……世界一格好よくて!世界一美しくて!世界一温かくて!それで、世界の家族がいる。このナザリック地下大墳墓に……守れなかった!取り戻せなかった!ギリツ!悔しいなあ」

「一影様、泣かないでください」

アウラに言われ自分がいつの間にか泣いていたことに気がついた。そしてアウラはゆっくりと俺の髪をなでる

「良く、マールが泣いた時はこうしてました!至高の御方々の代わりなんて恐れ多くて

言えませんが！あたしが一影様が寂しくないようにいつも元気いっぱいにお話させていただきます。」

小さな少女の言葉が心に染み渡る

「ありがとうアウラ」

俺はアウラの頬に手を添える

「一影様……」

アウラは顔を赤くし見下ろす。それはどこか官能的で妖艶で背德的でそして吸い込まれる表情だった。

種族の影響を受けているかはわからない。それでも俺はアウラを欲しているのかもしれない

「アウラ……」

トサツ

起き上がりアウラを地面に倒す。左手で自信の体重を支え右手でアウラの頬優しくなで指先が唇を通り、顎へといきアウラの顎を軽く持ち上げる

「……」

アウラはリングゴのように顔を真っ赤に染めている

「ありがとうアウラ。お前に俺は救われた……」

「一影さ、んっ」

俺はゆつくりとアウラの唇に自身の唇を軽く当てる。触れるだけのキス

「んっ、んっ」

ゆつくりとアウラの唇を啄み

「んんっ!?!.....んっん」

そして、舌を滑り込ませる。最初は緊張していて強張っていた唇も啄まれたあたりから力は抜け、舌はするりと入っていく

「いひえひ.....んっ.....ひゃひゃ」

舌を絡ませ、アウラの口の中をゆつくりねぶっていく。荒々しくはしない。すぐに壊れそうな少女を優しく壊さないように慎重にしかし逃がさないように、ゆつくりと

「もう.....あら.....ひ.....ら.....らめれひゅ.....んんっ!.....いひへひゃひゃっ!」

「はあ、はあ.....アウラ」

アウラの顔は脱力しきり口から零れる唾液と俺の唇とをつなぐ透明で輝く糸は淫靡に輝き、褐色の肌は朱がさし少女に似合わぬ妖艶さをだし、潤む少女の瞳は弱々しく艶やかで嗜虐性と背徳感をこれでもかと膨れ上がらせる

「かわいいぞ、アウラ」

「んっ」

再度唇を合わせゆつくりとアウラの太ももからゆつくりと服越しに手を這わせ腹部へと上がっていく

「んっ！んんっ！ん」

服のボタンは全て外しアウラの手は腹部から幼い瑞々しい柔肌を滑り脇腹へそして未熟な果実へ近づいていき果実に触れようとしたそのとき

『緊急通信！緊急通信！至急至急！発信元エラントル緊急通信！緊急通信！至急至急！
発信元エラントル！緊急通信！緊急通信！至急至急！発信元エラントル！』

「ちっ」

俺の頭は一気に冷める。アンボンタンに渡していた緊急通信装置が発報したのだ
「すまん、アウラ仕事が入った」

俺は毛布を出すと余韻に浸っているアウラに掛ける

「すまん、この埋め合わせは必ずする」

アウラの額にキスをすると美雲に姿を変えエラントルへ向かう

く 一影の消えた森 く

「えへ、えへへへへへ」

アウラはトリップし悶えていた

「あたし、一影様とキスしたんだ。エへへ」

顔をだらしなく緩め頬を染めて厭らしく笑いつづける

「はあ、一影様格好よかったなあ。」

アウラはしばらく体に力がはいらず、その場でしばらく余韻にひたりながら悶えていた。

く エラントテル く

「・・・・・・・・」

美雲の機嫌はすこぶる悪かった

「お疲れ様です！ 櫛灘の姐御!!」

「姐さん。実は外にアンデットの大群が！」

美雲は弱い殺気を周囲に放出すると周りは次々と気絶する

「アンポンタン、残った闇人を連れついてまいれ」

そう言い美雲は振り替えらず出ていく。そして誰に言うでもなく

「姐さん、俺達三人以外気絶してるぜ」

「姐さん、やっぱりすげえ！ 恐えけどそこに憧れるぜ！」

「一生ついていきやすぜ。姐さん」

三人は美雲を追いかけ走っていく

くエラントテル壁外く

外はアンデットの大群で埋め尽くされていた

「なんて数だ!?!」

「……………鬱陶しい。貴様ら掃除しろ手間取ったら死しかないと思え」

美雲は次次投げ飛ばし骨を砕きさっていく

「がってん！ 姐御に続け!!!」

「うおお!!! アンデット上等!!!」

「しゃおら!!! 骸骨がなんぼのもんじゃい!!!」

美雲について行くため必死に鍛え、美雲の暇潰しに文字通り地獄の修行をした彼らは今やそこらのアンデットでも止められなくなっておりアンデット軍相手に奮闘をする

「くそっ！ 姐さんはもうあんなに倒して！ あんな奥に！ てめえら気合いいれろや!!!」

「お前ら！ 気張ればや!!!」

「姐さんの背中！ 見失ってたまるか!!! ケツに力入れてぶっ倒せや！ おどれら!!!」

三人はそれぞれ鼓舞しあいアンデットを駆逐する勢いをつよめる

「己、アウラとの時間を潰しよって。死すら生ぬるい」

美雲から殺気が溢れる。そんなとき

「美雲さん、お待たせしました。とうか一人でこんなイベントに行くなんてずるいですよ。私も誘ってくださいよ」

どかあん!!!

いきなりアンデットを吹き飛ばしながらフルプレートアーマーに身を包んだ大剣の

双剣使いがあらわれる

「その声はアインズさんですか。今ストレス発散してるんですけど?」

美雲はアインズに話かけながらおもむろにナーベラルを撫でる

「一影様!?なにを!」

「ん?癒されてる。っていうか何んですか?あのでかいハムスタ」

美雲は冷たい目でアンデットと戦うハムスターと見る

「あれは森の賢王つて呼ばれているジャンガリアンハムスターのハムスケです。なんか成り行きでペットになりました。」

「へえ。俺は犬や猫の方が好きですけど、アインズさんの趣味ですか?」

「いや、趣味じゃないですよ?あと、この姿では漆黒のモモンつてよんでください」

「わかりましたよ。モモさん。それより俺は今メチャクチャイラついてるんでアンデット貰いますから本丸あげますよ。」

「なんかあつたんですか?」

「まあね、それに子どもがモモさん達を見ないように調整しますんで好きにどうぞ」

「ありがとうございます。あとモモンです。」

そう言いモモンは走っていく

「あ、あの、一影様。私はい、モモンさんを御守りしなければ」

「あと少し。そしたら落ち着くから」

しばらくしてナーベラルを解放すると二人はそれぞれの方向へ向かう

「はああく。ワシの怒り生易しくはないぞ？」

美雲から鬨気の巨人が現れる。

「壊れろ」

アンデットはそれぞれが勝手に飛び始める

「投げられ続けよ。ワシが飽きるまで」

「「姐さん！いかしますぜ!!!」」

『ごあああああ!!!』

大きな咆哮が聞こえ美雲がそちらを見ると骨のドラゴンが地に降りる

「そろそろ終いか。主らは後始末をせい、宴は終いじゃ」

「姐さん！あんなバカデカイドラゴンがいるのに終わりって！」

「.....」

デカイ稲妻が骨のドラゴン。骨竜を打ち砕く

「終いじゃ」

「まじ．．．．．かよ」

「そんな、バカデカイドラゴンを」

「誰だよ」

「主らは後片付けをせよ」

《アインズさん、そろそろ後片付けさせますんではれないように》

美雲はアインズにメッセージを送り。その場を去ってナザリックに帰還する

「アルベド！」

「御身の前に」

アルベドは一影の前に膝を付く

「頼みがある。もし．．．．．」

一影はアルベドを見ずに要件だけ伝える

「一影様！それはっ！」

「アインズさんを早くものにしないと他の娘にもつていかれるぞ？」ニヤニヤ
「お待ちください！一影様!!」

「頑張れよ」

一影は手をヒラヒラと振ると美雲となり転移する

数日後の朝

ギルドの前にも聞こえる声で漆黒のモモンの噂がされていた

ギーツ

「「おはようございます！櫛灘の姐御!!!」」

美雲がギルドに入るとアンポンタンと闇人が一斉に並び膝に手を当て頭を下げる道をつくる

「久しいな漆黒の健在であったか？」

美雲は道を見つめしモモンのもとへ行く

「久しいな、櫛灘殿」

「たんぱくな挨拶よのう。あんなに熱く燃え上がった仲ではないか。ヨヨヨヨヨ」

美雲は嘘泣きをすると周りは騒然となる

「な!?何をいつてるのだ!燃え上がったのは敵の拠点であつたらう!」
「つまらんのう漆黒の。どうじゃ?久しぶりに共に狩りにいかんかえ?」
「是非、ご一緒しよう」

くナザリツク地下大墳墓く

「これでやっと一緒に冒険できますね!一影さん」

「ああ、やっとだぜ。待たせ過ぎだ一杯奢れよ?アインズさん」

「なら、ピツキーの酒場ですかね?タダですし」

『あはははははは』

二人で話しているとアルベドが現れ

「アインズ様、一影様、シャルティアが……裏切りました。」

アインズはアルベドとすぐに状況の確認に行つたが一影は玉座に腰掛けてわらつていた

「早かつたなあ。フラグでも建てたかなあ？」

一影は笑い続ける

「アインズさん。何故俺がセンスイではなく一影にしたとおもいます？センスイは変装したもの、技をつかえ一影である。そして次なる影は一影九拳の技を学ぶ。俺は一影、闇の長である一影ではない、一影の別の完成形を求めて創造したキャラクターなんだぜ？俺は、一影は、何にでもなれるんだぜ？」ニヤツ

対立

アイNZは戻つてくると椅子を蹴り始める

「クソガーーーーーッ!!!クソガッ!クソガッ!クソガッ!」

「どうしたよう、アイNZさん。落ち着けよ。」

「これが落ち着いていられますか!!!シユーンテイグスターがレジストされたんですよ!シャルティアは精神支配に強い耐久性をもっている!シユーンテイグスターは超位魔法!わかりますか!この意味が!」

一影もその発言を聞き驚く。何故なら可能性はこれしかのこっていないからだったからだ
「ワールドアイテム……か。たしかにあつてもおかしくないな。俺らより先に人間種の転移者がいれば強者の噂は廃れたにしろ何かをなしとげたにしろ世に時代が経つていればひろがらないだろう。しかしアイテムは!」

「ええ!残ります!」

アイNZはピカッと光ると息を吐く

「アイNZさん、これからどうします?シユーンテイグスターがだめなら残る方法は!」

「シャルティアを殺すしかありませんね。私は準備してきます。ついてこいアルベド!」

「あ、ちょっとアルベドかりますね。すぐおいかけさせますんで」
　　「そういうアインズが消えると一影はアルベドに話し掛けるとすぐに一影もその場から姿を消す」

しばらくして一影が戻ってくると主だった守護者が集まっていた

「(それぞれワールドアイテムをもっていやがる。このクソ骸骨が)」

「よかった。一影さん私はこれからシャルティアと一騎討ちにしようと思います。もし私がまけて蘇生できなかつたらナザリックのことをよろっ」

ドガアアン!!!

アインズが全てを言い切る前に一影がアインズを殴り飛ばしアインズは壁に叩きつけられる

「一影様！」

アルベドはアインズの前に守るように立つ

「いたたた。これはどういうことですか？一影さん」

一影から流れでるオーラに他の守護者は動けずにいる

「自惚れてんじやねえよ。アインズどうやって勝つつもりだ？あんたがシャルティアに勝つつもりなら他のギルメンの装備と課金アイテムが必要だとおもうんだが？それに何故他の守護者をつわねえんだよ！」

「アイテムを惜しんでる場合じゃありませんね！それにナザリックの皆は私にとって子供も同然！子供同士の殺し合いが見たい親がどこにいますか!!」

アインズはアルベドを手で退けて一影のインナーの胸ぐらを掴む

「俺はお前のある一点を信頼してない信用したくない。お前にシャルティア討伐は無理だ。」

「なら！どうしろっていうんですか！子供達に殺し合いさせるんですか！」

「俺がいるだろ!!!俺はガチガチの戦闘用ビルドだ！わかるか！お前の今の立場が！ナザリックの支配しやだ!!お前が倒れたらどうなる！お前を殺したとしたシャルティアは!!」

「でも、あなたや他の者が死ぬよりはいい!!それに！女に手を挙げない主義だつて言っ

てたじゃないですか!!もしどうしても嫌だっというならギルドマスターとしての指示です!それにさからうなら」

いままでアインズから聞かなかった言葉【ギルドマスターとして】一影は憤怒の表情を浮かべると

「俺は!あんたのそう言うところが大嫌いだ!自分が負けたときを考えて守護者にワールドアイテムをもたせたんだろ!!そのくせまだかける必要のない蘇れるかわからないのに可能性がのこってるのに死ぬのを覚悟で周りに託して!一人で全部背負いこもうとするところが大嫌いだよ!!!ギルドマスターとしていうなら俺はナザリックをでて行ってやるよ!!持論をネジ曲げてもなあ!」

「なっ!?!」

「!!!?」

一影は背を向けると

「シャルティアは俺が殺す!手を出したら俺がナザリックを潰す!!」ギロっ

アインズを一睨みするとワープでとんでいく

「そん・・・な。あなたも・・・ナザリックを」

アインズは膝から崩れ落ちる

周りの守護者は女性陣は腰を抜かしガタガタ震え、男衆は漠然としていた。そんななか二つの涙声がアインズの耳に響く

「そんな、一影様が」

「嘘嘘、嘘ですよ。アインズ様」

マーレとアウラが泣きながらいう。アインズは人間の体になると呆然とした顔で静かに涙をながす

「アインズ様」

アルベドが震えながらアインズに声をかける

「一影様が遺した言葉です。もし、アインズ様がシャルティアを自分で殺す覚悟をしていたら自分はナザリックを出ていく覚悟で止めると」

「一影さんが」

「それを！それを！あなたは知っていないながら止めも相談すらしなかつたのですか！アルベド!!!」

デミウルゴスは怪物の顔へとなりながら今にもアルベドを殺さんばかりに睨む

「少し前、極秘で一影様から命令を受けていました。アインズ様と一影様が敵対したとき、アインズ様の味方であり続け、アインズ様の身を一番に考えろと」

「それが今回にどう関係ある!!!」

「先ほど私はアインズ様がシャルティアと戦ったらかつても負けてもアインズ様は苦しむとシャルティアを殺したら蘇らせたとしても可愛がつている娘を殺すことで心をいためる。あいつはナザリックを護りながら友との別れで充分くるしんだ。だからこれからの痛みは俺がひきうけるといっていました。そして、敵対したり意見がそれでも俺はナザリックを護る。アインズ様は上に立つ者としては優し過ぎると。もしナザリックの危機があつたら連絡しろ俺が力になるといっていました。」

「そんな、一影さん! あんただって! 全部背負い込もうとしているじゃないか!!! あんただって優し過ぎるじゃないか!!」

「もし! 一影様の身に何かあつたら責任は取ってもらいますよアアルベド」

「ええ。覚悟はのうえよ。アインズ様、一影様を見守りましょう。あのお方は孤高でこそ輝きます。」

アインズはオーバードに戻る。無理やり心を落ち着けるためだ

「皆さまなかつた。無様をさらしたな」

「いえアインズ様の優しさです! 無様などとてもありません!」

アルベドはアインズの手をとると椅子に座らせる。アインズはみんなの前に大きい水晶をだすとアインズと一部を除く守護者で水晶に写し出されたものを除く

「一影様ですわね」

「皆、勝算をどう思う。これは至高の42人というのを抜きに意見が聞きたい」

「コフィー、五分五分カト」

「して、コキユートス。その心は？」

「シャルティアモ一影様モ戦闘向キノ構成。シャルティアのスポイトランスノ回復ハ驚異ニナルカト、ソレニクワエ一影様ノ装備ノ真価ハ自信以上ノ相手ニムケテシカシ一影様ノレベルハ限界ヲコエルトノ話ヲキイテイマス、シャルティアノレベルハ一影様未滿トスルト互角カト」

「さすがコキユートス、アインズ様はいかがでしようか」

「一影さんがスキルを決められるかにかかるだろう。一影さんの魔法やスキルはピーキーなのが多く成功させるのが難しいからな、もし決められなければ」

「一影様が負けると」

「だが、そもそも戦えればの話だ。ユグドラシルのころから彼は人形や人形に近い敵に攻撃をだきなかつたり戸惑ったりする癖があつた」

その言葉に周りは黙る

「アインズ様、どうやら始まるようですわ」

森

森の一部がまるっと更地になっている

「さて、行くか。シャルティア今助けてやるからな」

一影は人とびでシャルティアの前に立つ。完全武装されたシャルティアはゆっくりと目を開けると笑いながら一影を見る

「ああ、一影さま！」

「シャルティア、何があつた？」

「何がでありんすか？たしかアインズ様の命でどうくつにいて、あれ？その後、それよりも一影様を殺したいでありんす！」

シャルティアは手に持つ槍。スポイトランスを一影の胸に突き立てる